

シニアパワーを社会の力にするチームづくり

国際協力の経験を還元する

シニア海外ボランティアとは：

「シニアボランティア経験を活かす会」は、JICA（独立行政法人 国際協力機構）からシニア海外ボランティアとして開発途上国に派遣された経験を持つ、東京や神奈川、埼玉に住んでいる者たちが中心となって組織しています。

青年海外協力隊をご存知の方は少ないでしょう。シニア海外ボランティアは青年海外協力隊のシニア版です。40歳以上69歳までの日本人ならどなたでも応募できます。シニア海外ボランティアとして採用されれば、それまでに培った技術や経験を活かし、派遣された現地の人々と協力しながら国づくりをするJICAのボランティア事業です。協力分野

は農林水産、保健・医療、鉱工業、行政、エネルギー、教育、社会福祉等々さまざまであり、2年間または1年間の派遣期間となります。

このシニア海外ボランティア制度が始まって21年になりますが、派遣されたシニア海外ボランティアは5000人近くになると聞いています。派遣された国はアジア、大洋州、中南米、中東が多く、数は少ないのですがアフリカにも派遣されています。

最初の顔合わせから1年4カ月。設立までの経緯

「シニアボランティア経験を活かす会」の設立は、平成14年夏、我が会の先輩K氏に対し「JICAシニア海外ボラン



井上 節子

特定非営利活動法人
シニアボランティア経験を活かす会 副理事長

【いのうえ せつこ】1946年千葉県生まれ。東京都公立小学校教諭、校長として2校経験の後早期退職し、JICAシニア海外ボランティアに応募。ネパールで障がい児療育施設でスタッフ養成にあたる。

ティアのOB会をつくってはどうか」という話を持ちかけられたことに端を発します。これを機に、帰国したOB OG 10名ほどが中心となって準備を重ねました。

しかし、準備に携わったメンバーは、シニア海外ボランティアとして派遣された国、地域がそれぞれ異なり、活動した職種も違います。経験が違ふことで、自ずと意見が違ってきます。

それ以上に、現役時代の経験の違いが、組織をまとめる上では一つの壁となったようです。準備に携わったメンバーはそれぞれが営業マンとして、熟練技術者として、経営者として、管理職としてなど各業務で先頭に立って活躍していた人たちです。意見も要望も各自がそれぞれに強いものを持っています。「誰のために、何ができるのか」「OB会を組織して何



をすべきなのか」など、具体的なことは見当がつかなかったと、当時の会員は語っています。

会合を重ねて議論は白熱化したようですが、具体的な案と結論が出ないまま時間だけが過ぎていたところ、平成15年に近県で別のシニア海外ボランティア経験者たちがOB会を発足するという情報が

入りました。そこでK氏をはじめメンバーたちが発奮して発起人会を組織し、平成16年1月31日に任意団体として設立総会が挙行されました。最初の顔合わせから既に1年4カ月の月日が流れていました。

当時はJICAのシニア海外ボランティア経験者を対象にした会でした。その後、平成17年秋に特定非営利活動法人（NPO法人）の認証を受け、現在150人前後の会員で活動しています。NPO法人として発足したのを機に、会員をシニア海外ボランティア経験者に限らず、広く国際理解、国際協力の分野に関心のある方々にも門戸を広げています。

「国際協力」「社会教育」「子どもの健全育成」を三本柱にした活動内容

私たちの会では「国際協力の活動」「社



ボランティア応募者への「なんでも相談会」入口

会教育の推進を図る活動」「子どもの健全育成を図る活動」を三本柱としています。これらを達成するために小・中学校、大学などの各種教育機関での授業サポートや研修会、講演会に講師派遣をしたり、地域の方々を対象とした国際理解に関する市民講座の講師を務めたりしています。その他、JICAから各地へ派遣されている青年海外協力隊員やシニア海外ボランティアに対する後方支援活動も行っています。

以下は、現在会員が積極的に活動している内容です。

① JICAとの関連活動

・ボランティア募集説明会での活動紹介、応募相談

↓これからボランティアに応募しようとする方々へのサポートであり、JICA事業のPRにもなっています。



・ボランティアから帰国した後の活動報告会

↓長期派遣から帰国し半年以内に発表します。活動の実態や課題について、会員のみならず関心のある方々にも聞いていただいています。

・JICAの施設で開かれるイベントへ協力（講演、写真展）
・JICAに依頼される出前授業（小・中・高校、市民講座等）への協力 等

②小・中学校での国際理解授業、キャリア教育授業

・公立、私立の小学校や中学校から依頼される世界の国々の様子を授業

↓学校の教師では伝えにくいその国の現状を、その国で生活し活動した会員が子どもたちに映像などもまじえながら話しています。

・生き方のモデルとしての話

↓シニア世代だからこそ子どもたちに話したい、伝えたいことがあります。

・専門分野（例えば環境問題、水の問題）の話を担当

↓教科書や図書館資料では分からない部分も、その専門家として仕事をしてきたからこそできる授業があります。

③日本語学習支援

昨今は外国、とりわけ東南アジアや中南米の国々から日本へ来ている子どもたちが多くなっています。日本の学校に転入学しても、言葉が分からずに困っている子どもやその保護者が多くいます。そのごく一部の方々に対してですが、放課後などの時間を活用し個別に日本語の学習支援を行っています。この活動は、日本語指導で派遣された経験を持つボランティアが中心となっており行っています。

④定例会合

このような活動は、NPO法人として活動を重ねていく間に少しずつですが広

がりを見せています。必要に迫られパンフレットを作成し、授業提案書や講演企画書を作成し、役所や学校など必要な部署へ配布しています。ホームページもできました。それぞれが持っている技術を活かして活動しているのは、派遣されている時も帰国してからも同じと言えます。それらのベースになるのは、週に一度、東京・広尾または神奈川・横浜のJICA施設で行われている定例会での忌憚のない話し合いです。それぞれ年に一度の総会（春）や意見交換会（秋）も行っています。

いろいろな意見を出し合い、自分が協力できそうな所は積極的に手を挙げてやる…この姿勢を大事に活動しています。時には意見が激しくぶつかり合うこともあります。最終的には「まあまあ」となって落ち着きます。会合の後には、楽しく「反省会」となることもあります。

⑤その他

外に向けた活動のほか、いろいろな講座を引き受けて話す機会が多いので、自分たちのスキルアップをしよう、という目的の会員同士の研究会も発足し活動を始めています。関わった講演を再現し、内容をチェックし「話し方は？」「時間は？」等々、お互いによりよいものとなるように勉強し合っています。

無理はせず、自分がやれることをやる時に実行していこう

こうした活動を実施していく上で会員が申し合わせていることが一つあります。それは「仲間と楽しく活動しよう！」ということです。

具体的には「私たちの活動は金儲けのためではない。経験したことを活用して世の中の役に立つのであれば喜んでやっという。無理はしないで、自分がやることをやる時に実行していこう」ということです。もちろん、さまざまな事情によりメンバーの入れ替わりはありますが、このスタンスは変わりません。

シニア世代ですし、どうしても健康的にいろいろな問題を抱えることもあります。その点からお互いに無理は禁物です。それぞれの事情には深入りせず、「個」を大切にしながらお互いをいたわりあつて（？）います。

**私たちにも何かできないか？
東日本大震災の被災地支援**

2011年3月11日に起きた東日本大震災に関しては、たまたま派遣国の事情で一時帰国していた青年海外協力隊のメンバーが被災地で支援活動をしているとの情報が入りました。

これを受け、我が会の6月定例会でも「我々も何か会として行動できないか？」との声が上がりました。話し合いに参加していたメンバー全員が「何かしたい」「何か役立ちたい」と同じ気持ちでした。

しかし、「今はその時ではない！ 今、現地に飛んだところで、私たちシニアは足手まといになるだけだ。それよりも、もう少し時期を待って、頭脳労働が必要になったらその時こそ我々の出番だ」という結論に至りました。経営的な相談に乗ったり、IT関係の修復に関与したり、事務的なサポートをしたりといったことができる時期になれば、必要とされることが



定期総会

ところに喜んで行こう、ということ意見がまとまりました。

この原稿を書いている2011年10月現在、そろそろ「その時」が来たように感じ、現地情報を集め、調査のために会員を送り出そうとしています。出番が来た今の会員の表情は、普段よりさらに生き生きと輝いて見えます。

**経験を社会に還元することで
自分自身も元気になれるから**

我が会のメンバーは、誰もが活動を楽しんでやっています。自分たちの今までの生き様や経験してきたボランティア活動についてだけでなく、派遣された開発途上国の様子、厳しい環境の中でも力強く生きている人々のこと、屈託のない子どもたちの笑顔などを、日本の若い世代や子どもたち、また、私たちと同世代の方に伝えることに生きがいを感じています。それを伝えることで、日本という国や個人としての生き方を考えるチャンスにしてほしいという思いもあります。

私たちは、自分たちの経験が役立つのであれば喜んで実践していこうとしています。活動を通して、自分が必要とされていることを実感し、またさらに豊かな人間として育ててもらえると考えています。そして、何よりも自分自身が元気になれるのです。